特集　「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」

184 号特集部会
澤田浩子（部会長），河住有希子，長谷川守寿

【本特集号の趣旨】

本特集号のテーマは，「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」としました。日本語教育学会の社会的研究課題 3「多様なキャリア形成のための日本語教育内容の体系的再編成」に基づき，「キャリア形成」の捉え方がどのように変容しつつあるか考察することを目的としています。特に「日本語教育の推進に関する法律」の成立（2019 年）以降，自治体や小中高等学校等におけるキャリア支援の取り組みがどのような展開を見せつつあるのか，また多様化する社会の中で，国内外の大学や海外教育機関での取り組みはどのように進展していくのか，事例を共有するとともに，そこで新たに見えてきた課題を取り上げることを目指しました。

また, 学習者のキャリア形成を支援する教育の現場は, そこに携わる支援者や教員にとっても自己成長を求められる学びの場であると言えます。日本語学習者のキャリア形成だけでなく，日本語教育人材にとってのキャリア形成という視点からの論考も取り上げることで，日本語教育内容の体系的な再編成へ向けた学会全体の議論を活性化できればと考えています。

これらの視点から，本特集号では「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」について寄稿論文 5 本を依頼し，掲載することができました。

【本特集号の内容】

本特集号では，以下の 5 本の寄稿論文を掲載いたします。

・外国にルーツのある子どものキャリア支援―小中学校の取り組み―
（佐藤 郡衛氏：寄稿論文）
・外国につながる若者の居場所づくりとキャリア支援―都立定時制高校における三者協働の実践―　（徳永 智子氏・角田 仁氏・海老原 周子氏：寄稿論文）
・大学における留学生のキャリア教育―多様な留学生とつくる豊かな学びの場―
（丸山 千歌氏：寄稿論文）
・生活者としての外国人のキャリア形成―インドネシア人移住労働者コミュニティの事例―
（吹原 豊氏：寄稿論文）
・東南アジア 5 か国比較と調査に見るフィリピン人日本語教師のキャリアと成長
（古川 嘉子氏：寄稿論文）

佐藤論文は，外国にルーツのある子どもにとって，小中学生段階でキャリア発達を促すにはどのような支援と教育的対応が必要かについて論じています。中学校卒業後の進路選

『日本語教育』184号（2023.4）　ONLINE ISSN: 2424-2039
発行：公益社団法人日本語教育学会

択の幅を広げるためには，小学校段階から長期的な視点で子どものキャリア形成を支える支援が必要で，就学の保障は言うまでもなく，学校や地域での社会資源の創出，社会正義の視点に基づくエンパワメント型の教育，ライフコースの多様性の保障など，重要な視点が提示されています。そして，国内の様々な自治体や学校，NPO 団体等の教育実践を取り上げ，「自分づくり」「社会関係づくり」「将来につなげる」「社会参加」の 4 類型に基づき分析を加え，今後のキャリア教育の体系化につながる提案と課題を提示しています。

徳永・角田・海老原論文は，外国につながる子ども・若者にとって，高等学校以降の段階でどのようなキャリア支援が必要かについて論じたものです。高校進学における現状の課題を概観した上で，大阪府や神奈川県，東京都など，先進自治体における近年の進路保障の取り組みを紹介しています。また，筆者らの定時制高校での居場所づくり・キャリア支援の実践を題材に検討を行い，生徒に様々な役割を与えコミュニティに貢献する機会を創ること，学校内外の多様なアクターと協働し支援体制を拡大すること，長期的な視点から卒業後も支援を継続できる体制を整えることなど，その考察には若者のキャリア支援に必要な具体的な知見が多く含まれています。

丸山論文は，「留学生就職促進教育プログラム認定制度」を概観するとともに，同制度が対象としていない留学生の存在にも目を向けて，留学生へのキャリア教育の可能性と課題を論じたものです。「大学に所属する留学生」と一口に言っても，日本との関わり方や進路には様々な選択肢があり，若い留学生が多様な他者と関わりながら自らの人生をデザインしていくための学びの場を設計することが豊かな教育につながることを，実践例によって示しています。また本論考では，留学生が自身の未来を切り拓いていく過程で，そこに関係したステークホルダーにもそれぞれに学びがあったことにも着目し，今後のキャリア教育における新たな視点が示されました。

吹原論文は，生活者としての外国人のキャリア形成について，茨城県東茨城郡大洗町のインドネシア人移住労働者コミュニティ成員の事例を基に述べたものです。先行研究と同様に，このコミュニティ成員の場合も，日本におけるキャリア形成を妨げている大きな要因の一つは日本語習得が進まないことであり，口頭能力は概ね初級の範囲に留まっています。しかし，ごく少数ですが中級に至った成員もいます。どのようにして中級に至ったのか，その日本語習得のプロセスを明らかにした上で，そのようなプロセスに至る環境の整備を提言し，さらには現在大洗町で実施されている「まなびの輪」の活動がキャリア形成の場となる可能性についても言及しています。

古川論文は，フィリピン人日本語教師のキャリア形成を制度面と教師個々の認識の両側面から詳細に記述したものです。冒頭に，東南アジア 5 カ国を比較するとフィリピンは日本語教師養成や研修の制度が短期かつ断片的であることが指摘されています。しかし後半のインタビュー調査の結果からは，制度が整わない中でも自己研修を継続し，熱意をもって教育にあたり，自身の人生を豊かなものとしていることが分かります。フィリピン人日本語教師がより専門性を高め，安定した職業として日本語教育を続けていくためには，「専門性の三位一体モデル」に基づく振り返りの機会と，公的機関における継続的な支援が必要であることが指摘されています。

日本語教育の現場に求められるキャリア支援は，高度職業人として必要なコミュニケー

『日本語教育』184号（2023.4）
ONLINE ISSN: 2424-2039
発行：公益社団法人日本語教育学会

ション能力の育成だけでなく，生活者としての外国人にとって自律的に就労・生活環境を構築できるコミュニケーション能力の育成，また年少者にとっては人生の基盤形成となる長期的かつ包括的なキャリア発達支援など多岐に渡ります。本特集では，小中学校，高等学校，大学と，その成長と教育の段階において，また国内の生活者において，あるいは海外における日本語教育人材において，それぞれの現場からキャリア形成に必要な教育・支援のあり方を論じていただきました。筆者自身による実践も含め，多くの先駆的事例が共有され，それら実践の蓄積から得られる知見は，キャリア形成のための教育内容の体系的再編に向けた議論の原動力となると思います。これらの論考を通じて，日本語人材・複言語人材が活躍できる社会の実現へ向けて，また，ともに学び多様性ある社会を創っていくための日本語教育のあり方について，議論を喚起する一助となれば幸いです。

『日本語教育』184号（2023.4）
ONLINE ISSN: 2424-2039
発行：公益社団法人日本語教育学会